

Das Projekt HafenCity と Elbphilharmonie Open Air について

三宅 洗太郎¹

はじめに

現在、ドイツ・ハンブルクでは、ヨーロッパ最大の都市開発プロジェクトが進行中である。„Das Projekt HafenCity²“（以下、ハーフェンシティ・プロジェクトと称す）と名付けられたそのプロジェクトは、使われなくなった港を再開発して市街地を約 40% 拡張するというものであり、ドイツ第二の都市ハンブルクに新たな都市空間が誕生しようとしている。

そのプロジェクトのハイライトが、コンサートホール„Elbphilharmonie“（以下、エルプフィルハーモニーと称す）の建設だ。世界的な建築家、ジャック・ヘルツォーク Jacques Herzog とピエール・ド・ムーロン Pierre de Meuron によって設計されたこのコンサートホールは、以前使われていた赤レンガ倉庫の上に増築されたファザード内に位置する。この建物内には他にも、ホテルや一般住居、公共空間である広場も設けられ、完成後はハンブルクの最新のランドマークになる予定だ。

以下では、このハーフェンシティ・プロジェクトとエルプフィルハーモニーをテーマとして取り上げる。9 月 17 日と 18 日に行われた„Elbphilharmonie Open Air“の様子も、併せて報告したい。

1. 「ハンブルク自由港」から「ハーフェンシティ」へ

ドイツ北部に位置するハンブルクは、正式には自由ハンザ都市ハンブルク Freie und Hansestadt Hamburg と称し、面積 755km²、人口 179 万人を擁する「都市州 Stadtstaat」である³。正式名からわかるとおり、中世以来ハンザ同盟の中心地として、特に文化や経

済の面で栄えてきた。

ハンブルクの繁栄とハンブルク港の歴史、そしてハーフェンシティの今後は、言うまでもなく密接に関係している。もともと、ハンブルク港は「自由港」であった。倉庫街は 1888 年 5 月の自由港誕生に先だって完成し、この地域は、新ゴシック様式の赤レンガ造りの街となった。その後、第二次世界大戦で破壊されたものの、修復後の 1967 年に現在の姿となり、同港は現在、ドイツ最大の、ヨーロッパにおいてもロッテルダムに次いで重要な港である。

ところが、コンテナの誕生により物流システムが変化し、エルベ川沿いにそれに対応できるターミナルが新設されたこと、そして EU の発足後、シェンゲン協定加盟国が増え、自由港であることの価値が失われたことが倉庫街にも変化を及ぼす。1997 年、ハンブルク州は港の再開発を決定し、2003 年に倉庫街は自由港の枠を外れた。「ハーフェンシティ・プロジェクト」は、この地域を再開発して新たな都市空間を創造するという取り組みである。この地域の歴史的な街並みは以前から観光名所であったが、ここに新たなアクセントが加わることにより、ハンブルクは今、「伝統」と「未来」を兼ね揃えた「新たな都市」に生まれ変わろうとしている。

2. プロジェクトの計画と現状

当初の計画によると、このプロジェクトでは 2020 年までに 157 ヘクタールが再開発される。„mixed use“という方針のもと、住居や企業、学校、レジャー施設が、あらかじめ定められた区画ごとに段階的に新設され、完成

後には1万2,000人が5,500戸の住居に暮らし、新規雇用は少なくとも4万人が見込まれている。

そして先に述べたように、このプロジェクトのハイライトが、現在建設中のエルプフィルハーモニーである。開発の第一期には約3分の1の地域が着工される予定であるが、その地域の東西両端の建物はハーフェンシティを象徴するという役目を担う。東の象徴が、「デア・シュピーゲル Der Spiegel」の新社屋、そして西の象徴が、このエルプフィルハーモニーである。赤レンガ倉庫の上にガラス張りのファザードが増築され、波がイメージされた屋根部分は、84.5m、90m、100.83m、そしてこの建物の高さである110mの頂点が、それぞれなめらかに結ばれる。壁には一部、外から見ると穴が開いているように見える部分もあり、屋根には採光用の吹き抜けや屋上テラスも整備される予定だ。内部には、2,150席、パイプオルガン付の大ホールと、550席の小ホールが建設されるほか、247室から成るホテル、レストランや100m²から300m²の広さの住居45室も新たに建設される。これらはすべて、新築されるガラス張りのファザード内に位置し、地上の入り口から建物内へは、高さ85mのアーチ下に設けられた全長20mのエスカレーターで向かうことになる。このエスカレーターを上った先、高さ約37mの地点には、市内を360度一望できる広場が3,200m²にわたって設けられる予定だ。

このエルプフィルハーモニーの計画予算は当初3億9,990万ユーロであり、ハンブルクやドイツの文化的記念碑というだけではなく、ヨーロッパの文化的シンボルになることが期待されている。2007年4月2日の建設着工以来、その特徴的な建物は、地上からも船上からも、そして上空からも注目を集めてきた。今、ハンブルクはまさに、ベルリンやパリ、ロンドンなどの都市を超える「文化創造都市」へと変わろうとしているのである。

この巨大プロジェクトには、関係者やハンブルク市民だけでなく観光客もが関心を寄せ、現場を見ようと「ハーフェンシティ・インフォ・センター Das Hafencity InfoCenter im Kesselhaus」や「エルプフィルハーモニー・パビリオン Elbphilharmonie Pavillon」を訪れている。前者ではハーフェンシティについての様々な情報や資料を展示しているほか、ハーフェンシティ全体の完成モデルもあり、誰もが一目で「未来のハーフェンシティ」を知ることができる。また、後者では大ホールの模型を舞台の位置から360度見回すことが出来るほか、施設解説や子ども向けプログラムの解説などの幅広く総合的な展示が、内容を入れ替えながら行われている。建物外部の壁に取り付けられた多数のスピーカーからは、ハンブルクに縁のある作曲家や音楽家の演奏が流れてきたり、レジデンス・オーケストラとなることが既に決まっている北ドイツ放送交響楽団 NDR Sinfonieorchester の映像が見られたりと、いつパビリオンに来ても飽きない工夫がされている。また、両者ともにガイド・ツアーが実施されており、幅広い人を対象とする様々なプログラムによって、このプロジェクトに対するコンセンサスを広く得ようとしていることがわかる。プロジェクトそのものだけではなく、その開発手法や合意形成の過程などの面からも、このプロジェクトが今後のウォーターフロント開発における1つのモデルとなることは、間違いないだろう。

3. プロジェクトの課題

しかし、このプロジェクトは現在、多くの問題を抱えている。それは、このプロジェクトに対するハンブルク市民の声に耳を傾けるとよくわかる。このプロジェクト全体へ投資される予算の大幅な増加や完成時期の延期、また計画プランそのものへの異議など、声となって表れるその多くが今や批判的なものだ。

まず、予算の大幅な増加についてであるが、

このプロジェクトの当初の計画予算は 51 億ユーロであった。しかし、現在、この額は倍以上に膨れ上がっている。2011 年 2 月の州議会選挙における CDU (Christlich-Demokratische Union Deutschlands) の大敗および政権交代と、一連のエルベ川一帯の開発問題は無関係ではない。現時点での経費増加に関しては、エルプフィルハーモニーの建設費用の高騰に因る部分が大きいと言えるが、今後、この総経費はさらに増加していくと考えられるだろう。

また、完成時期の延期については、エルプフィルハーモニーに関して特に言及されている。エルプフィルハーモニーの当初の竣工予定は 2009 年であった。しかし、様々なトラブルにより 2010 年、2012 年と竣工予定時期が延ばされてきた。現時点で正式に発表されている限りではこの 2012 年が完成予定であるが、2011 年 8 月にはファザードにおける設計トラブルが見つかったほか、11 月には一部メディアにおいて、さらなる遅れが出ることが確実であるという旨が報じられた。

このような現状を受けて、計画そのものへの異議がハンブルク市民の間で目立ち始めたのも事実だ。実際にハーフェンシティが現れるにつれ、「このプロジェクトは、一般のハンブルク市民のための開発ではなく、ハンブルクの都市イメージのための開発だ」という声が大きくなっている。ハンブルク市など開発側は、ハーフェンシティを全ての生活機能の整った、いわばその地域だけで完結した小さな街にしようとしている。その街に、現在市の北部に住んでいる富裕層と、一般市民や南部に住んでいる外国人居住者および貧困層を共存させようという意図だ。開発側は、その時その状況に応じて開発の変更が可能なるようにと、また、まさにこの地域で 1929 年、世界恐慌のために開発に急ブレーキがかかったという過去があるため、段階的に地域を区切って開発を進行させており、例えば街の中心

である Jungfernstieg からハーフェンシティに延びる地下鉄新線 U4 は、現在建設中ではあるが未だにその最終目的地は定まっていない。全てをゼロから作り上げる必要のある予測不能な要素の多いプロジェクトに対して、一般市民が未来都市のために先行投資をするような余裕はないのが現状だ。このプロジェクト開始以来、ハーフェンシティに住むことを希望している人は増加しているということであるが、しかしながら実際に土地を購入する多くは富裕層である。市民と開発側の間にあるこの意識の差は、今後、両者間のさらなる相違の肥大化を生むという危険性を孕んでいると言えるだろう。

また、ハンブルクはこれまでの取り組みが評価され、2011 年の「欧州環境首都」となった。このプロジェクトにおいても環境対策は重要なキーワードであるが、その対策がもはや単なる対外的なアピールになっていると一部に捉えられているのも事実である。教育や福祉などへの予算を増加させず、このプロジェクトへの予算を増加させているという理由からの批判も目立つ。

その批判の矛先は、やはり象徴であるエルプフィルハーモニーへと向かいやすい。ウィーンやチューリヒの劇場、フェスティバルの指揮、経営をしてきた経験を持つ General-intendant の Christoph Lieben-Seutter 氏のもと、「華々しいビジョン」「魅惑的なコンセプト」「伝統と革新の融合」などのテーマにおける「すべての人に対する、すべてのジャンルにおける、包括的なプログラミング」を既に提供し始めている HamburgMusik gGmbH Elbphilharmonie und Laeiszhalle Betriebsgesellschaft⁴であるが、それでも解決すべき課題は目立つ。そこで、実際の市民の反応を確かめるべく、「Elbphilharmonie Open Air」を訪れた。

4. „Elbphilharmonie Open Air“ 当日の様子

2011年9月3週目の週末である17日と18日、エルプフィルハーモニー横の広場にて、„Elbphilharmonie Open Air“というイベントが開かれた。階段状の広場にはステージが設けられ、2日間で10個のステージパフォーマンス（無料）のほか、エルプフィルハーモニーを紹介するブースや内部見学ツアーも行われていた。筆者が見学できた17日昼間の様子を以下に記したい。

17日のステージプログラムは11時からであった。筆者が12時頃に到着してまず驚いたのが、その人の少なさであった。最初のプログラムは既に終わっていたが、人はチラホラいる程度であり、ブースなどもそれほど賑わっていなかった。近くにあるパビリオンへも立ち寄ったが、こちらも普段と同じ程度の人の入りであった。この日は、同地区において„HafenCity Sommerfest⁵“が行われていたため、この時間帯はこちらに人が流れたものと思われる。

13時ごろに広場へ戻り、内部見学ツアーに参加した。普段のツアーは事前予約制であり参加がなかなか困難であるのだが、この日は予約不要とあって多くの人で賑わっていた。見学できた場所は、住居部分とコンサートホール。見る限りでは、完成部分は基礎土台のみ、これから造られていくという状況であったが、内部では担当者による説明やパネル展示も行われていた。

14時30分からの„Kinderkonzert⁶“に合わせて、広場へ戻った。このコンサートは„Dr. Sound im Einsatz « mit Elbtonal Percussion⁷”と名付けられ、今回のステージパフォーマンスの目玉の一つでもあった。開演が近づくにつれ、広場は多くの見物人で賑わい、開演時には広場横の通路にも人があふれていた。このイベントに合わせて来たと思われる家族連れも多く、子ども達の姿が目立った。このコンサートはドラム演奏をメインとしたもの

であったが、出演者である喜劇役者と5人のドラムグループ（うち1人はナレーション担当）の間で繰り広げられる掛け合いの中には、エルベ川にちなみ「川」や「水」、あるいは「世界」といった全体のテーマが見られ、エルプフィルハーモニーやプロジェクトのアピールも兼ねられていた。なお、演奏された曲は、最初はアフリカのもの、2曲目はサン＝サーンス Charles Camille Saint-Saëns の《動物の謝肉祭》からの抜粋であり、その後には、グループのメンバーの1人が作曲したという、日本をテーマにした曲もあった（太鼓が多用され、「はっ」「やっ」などの掛け声もあった）。その他、アジアをイメージした曲など計6曲が演奏され、それぞれの曲間にはナレーションと役者の掛け合い、または子どもたちの参加できるパフォーマンスがあり、全体としては1時間程度のプログラムであった。

無料ということもあっただろうが、多くの人々がこの„Elbphilharmonie Open Air“を訪れていたことから、このエルプフィルハーモニーおよびハーフェンシティ・プロジェクトがいかに注目を集めているかが分かった。筆者の見学したプログラムに来場した家族連れの中には、このハーフェンシティの現状やステージパフォーマンスを観ながら、将来自分の子どもの直接関わってくる州の教育政策とプロジェクトとのバランスについて考えた人もいたであろう。ハンブルクのブラームス博物館を見学した際に職員の方が、「このプロジェクトに対する良い意見も悪い意見も知っているけれど、ホールに関しては実際に『音』を聴いてみないとわからないし、ハーフェンシティだって歩いてみないとわからないわ」と話していたように、実際にエルプフィルハーモニーが完成し、数年後にハーフェンシティ・プロジェクトが完結しないと見えてこない部分もまだまだたくさんある。今ある「声」を受けて、このプロジェクトの特徴の一つで

ある臨機応変な開発が、どのように実を結ぶのか。来夏までのハンブルクでの留学期間中を含め、これからもこのプロジェクトに注目していきたい。

¹ 神戸大学国際文化学部国際文化学科 現代文化論講座芸術文化論コース。2011年夏よりハンブルクに留学中。

² 表記は Hafencity Hamburg に依る
(<http://www.hafencity.com/de/ueberblick/das-projekt-hafencity.html>)。

³ データは 2010年12月のもの
([http://www.hamburg.emb-japan.go.jp/downloads/hamburg_info.pdf#search='755 179 hamburg'](http://www.hamburg.emb-japan.go.jp/downloads/hamburg_info.pdf#search='755%20179%20hamburg'))。

⁴ Laeiszhalle は 1908年、ハンブルクの船主 Carl Heinrich Laeisz と妻 Sophie Christine によって建てられた、大小2つのホールから成るコンサートホール。Musikhalle と一時呼ばれていたが、2005年に再び同名に戻された。Elbphilharmonie には老朽化した同ホールに代わる、より規模の大きい、より多様な音楽の場としての役割が期待されている。

⁵ 表記は <http://www.hafencity-sommerfest.de/> に依る。

⁶ 詳細は <http://www.elbphilharmonie.de/events/000000e9:00013043.de> 参照。

⁷ 表記は、会場に掲示されていたポスターに依る。

◆参考文献

Briegleb, Till. 2007. *Eine Vision Wird Wirklichkeit auf Historischem Grund: die Elbphilharmonie Entsteht*. Hamburg: Murmann Verlag.

Ein magischer Ort -HAMBURG FREUT SICH AUF DIE ELBPHILHARMONIE-. 2011. Ein Magazin des Freundeskreises Elbphilharmonie + Laeiszhalle e.V. im Klaus Schümann Verlag.

Ingwersen, S., Beseler, M., Treichel, A. 2008. *Schlichte Pracht und viel Musik: Die Hamburger Musikhalle, die sich Laeiszhalle nennt*. Hamburg: Franzbrötchen-Verlag.

Mischke, Joachim. 2008. *Hamburg Musik!*. Hamburg: Hoffmann und Campe Verlag.

Rauhe, Hermann. 2008. *Musikstadt Hamburg: Eine klingende Chronik*. Hamburg: Ellert&Richter Verlag GmbH.

沖島景 (2010) 『旅名人ブックス 95 ハンブルク』日経 BP 企画

フリードリヒ・ヘルツフェルト (渡辺護訳) (2010) 『わたしたちの音楽史 [上・下]』白水社

◆参考ウェブサイト（全て 2011 年 12 月 30 日最終閲覧）

Elbphilharmonie Hamburg. <http://www.elbphilharmonie.de/home.de>

Elbphilharmonie Hamburg -Alles über Europas größte Kulturbastelle-

<http://www.elbphilharmonie-erleben.de/de/>

HAFENBLOG DEIN LOTSE DURCH DEN HAMBURGER HAFEN. <http://hafenblog.de/>

HafenCity Hamburg. <http://www.hafencity.com/>

HafenCity Sommerfest. <http://www.hafencity-sommerfest.de/>

日独交流 150 周年 <http://dj150.jp/d/index.html>

BR.de. 5 November, 2011. „Elbphilharmonie Düstere Aussichten.“

<http://www.br.de/radio/br-klassik/sendungen/piazza/klassik-aktuell-elbphilharmonie-bauarbeiten-102.html>

BR.de. 29 Dezember, 2011. „Ärger auf der Baustelle Endlosprojekt Elbphilharmonie.“

<http://www.br.de/radio/br-klassik/sendungen/allegro/elbphilharmonie-aerger-auf-der-baustelle100.html>

Frankfurter Allgemeine Zeitung (FAZ.NET). 31 Mai, 2010. „Hamburger Elbphilharmonie Imposante Welle auf Tiefgang.“

<http://www.faz.net/aktuell/feuilleton/hamburger-elbphilharmonie-imposante-welle-auf-tiefgang-1981757.html>

Frankfurter Allgemeine Zeitung (FAZ.NET). 9 Oktober, 2010. „Der Steuerzahler legt immer drauf (2) Elbphilharmonie.“

<http://www.faz.net/aktuell/wirtschaft/der-steuerzahler-legt-immer-drauf-2-elbphilharmonie-11051206.html>

Frankfurter Allgemeine Zeitung (FAZ.NET). 15 November, 2011.

„Im Gespräch: Architekt Pierre de Meuron„Bei der Elbphilharmonie wackelt der Schwanz mit dem Hund.“

<http://www.faz.net/aktuell/wirtschaft/unternehmen/im-gespraech-architekt-pierre-de-meuron-bei-der-elbphilharmonie-wackelt-der-schwanz-mit-dem-hund-11529954.html>

Hamburger Abendblatt. 24 November, 2011. „Verband der deutschen Konzertdirektion Konzerte in der Laeishalle: Ständige Misstöne.“

<http://www.abendblatt.de/kultur-live/article2103965/Konzerte-in-der-Laeishalle-Staendige-Misstoe.html>